

文教大学大学院言語文化研究科修士課程

2026年度1期入学試験問題

(2025年9月7日実施)

外国語科目（日本語）

問題用紙

受験番号	氏名

文教大学大学院言語文化研究科
2026 年度第 1 期入学試験問題
(2025 年 9 月 7 日実施)

外国語科目（日本語）問題用紙

* 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

設問 I. 漢字の読み方と書き方 <複数解答不可>

問 1. 次の下線部の読み方をひらがなで書きなさい。

1. 言語学における有標性
2. 母集団の特徴を把握することが不可欠である
3. 模倣と反復による言語習得
4. 実践的な活動を導入する
5. 日本語の音象徴の研究
6. 自律的な学びに寄与する研究
7. 行動様式の変容が求められる
8. 200 人を対象とした調査をやり遂げた
9. 固定観念を取り除き、問題の本質を見極める

問 2. 下線部のひらがなは漢字に、漢字はひらがなに直して書きなさい。

1. このお菓子は素朴な味でおいしいが、何か物足りない。
2. 災害時のこんらんを防ぐためにはじゅうなんな対応が求められる。
3. 経済的な不安を抱えたまま 10 人もの家族を養ってきた。
4. 無意識にリスクを背負ってしまう人がある。
5. そしき内の秩序をいじするのは非常に難しい。
6. 働くことは唯一の社会こうけんだと思う。
7. 日本に長期間たいざいしてかちかんが変化した。

設問Ⅱ. 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

われわれは長い間、文章の意味は正しいものがひとつだけある、という(1)正解神話を信奉してきた。そして、その正解は、作者、筆者がその文章に込めようとしたものであるとした。いくつかの解釈があるときには、筆者の考えが最優先するという作者絶対視の考えをとってきた。おそらく、学校の教育が知らず知らずのうちに、(①植えつける) 考えである。

そのために、われわれの読みはかなり歪^{ゆが}んだものになっているが、普通はそのことに気付かない。もっとも、既知を読む^{読む}のであれば、正しい読みがどんなものなのか、考えることもないから、気楽である。

[②]、未知を読む^{読む}となると、正解を避けて通るわけには行かない。読者はそれを目ざして読むのである。

文章の意味として、かならずしも、その筆者の考えがもっとも正しいという保証はない、ということを知るのは、本当に読むことを考えるとき、きわめて重要な問題である。(2)妥当な意味とは、存在するものではなく、発見されるものである。ある時点では妥当な意味であったものが、別の時点ではそうでなくなることはいくらかでもある。筆者の意図したのも、ひとつの意味であって、決して絶対的なものではない。それだけではなく、ときには、読者がよりすぐれた解釈を発見することもありうる。

イギリスの詩人T・S・エリオットは、すぐれた批評家でもあったが、晩年になって、読者の解釈ということについて新しい考えを示した。未知の読者から作品に関して思いもかけぬ質問を受ける。そしてそれによってこれまで(③気付く) にいた意味を教えられることもすくなくないというのである。

作者が読者に教えられるというのは、若い詩人や批評家には認めにくいことであろう。作者が決して万能でないところに、文学や表現のおもしろいところがあるのであって、作者にとっても未知のことがありうる。

解釈ということについては、ほとんど問題のない既知の読み方は別として、未知を読むときには、読者が、書き手の意図したところを過不足なく読みとるというのは、実際には、考えることは難しい。

筆者と読者との間には、文章の解釈について、つねにある不一致が存在する。すべきものである。人間はおのおの独自の世界に生きている。表現に関係づけて、その世界のことを(3)コンテキストと呼ぶことができる。

筆者の背負っているコンテキストと読者のもっているコンテキストは、いくら近似的であっても、かならず違っている。かりに、まったく一致符合するコンテキストをもっている二人がいれば、それはどちらかが人間ではない。

コンテキストが違っていれば、同じ表現について、必然的に異なる解釈が生まれるはず

である。意味はコンテキストから離れては存在し得ないからである。

筆者がその表現に込めた意味は、読者が読みとる意味とつねに多少とも違っているものである。これが完全に一致するように考えるとところから観念的で、空虚読みの考えが生まれる。

筆者と読者のコンテキストの差を、もっともはげしい形で示すのが添削であろう。ここでは、作者よりも第三者、添削者の解釈の方が優位に立つ。読者に当たる添削者は、作品の中に、ときとして作者の考えていないようなコンテキストをもち込み、新しい意味をつくり出す。

添削者は原表現に対して破壊的読者である。しかし、それによって、よりすぐれた新しい意味を見出すことができるならば、創造的読者だと言ってよい。

(中略) ときとして、誤解がおこるのは止むを得ない。それにもかかわらず、添削がいまなお行われているのは、それがすぐれた作品を生むきっかけになるからにほかならない。

添削が他人の作品に対して行われるのに対して、推敲は自作について行われる。初案を得た時のコンテキストと推敲するときのコンテキストは違っている。執筆から時間がたつて、それだけコンテキストが変っているからである。かなり大きく違っていなければ、推敲の意義もすくない。(中略)

アメリカの作家(4)ヘミングウェイは、作品ができると原稿を銀行の貸金庫の中へ入れてしばらく眠らせておく。かなり時間が(④ 経つ)から、とり出してきて、新しい目で読みかえす。これをくりかえして意に添うようになってはじめて出版にまわしたという。作者においても読書百遍^{注3)}に似たことが行われる例である。

初稿を書き上げるときのコンテキストは特殊性のつよい可能性がある。推敲はそれをより普遍的なコンテキストに立って、見直しをする。作者自らの手による古典化の作業であるということもできる。[⑤]、初案がいちばんすぐれていて、推敲によって、かえって作品が崩れるということもないわけではない。

添削や推敲が、俳句とか短歌の短詩型文学において、ことに大きな意味をもっているのは、それだけ言外のコンテキストに依存する度合いが大きいことを物語っている。ただ、添削はどこか古風な感じを与える。俳句や短歌ならともかく、小説などではほとんど行われない。そればかりか、勝手に他人の書いたものを変えるのは著作権から見ても、あるいは表現の自由の保証の観点からしても、おもしろくない問題があるように考えられる。

(外山滋比古(2024)『新版「読み」の整理学』より、一部改変)

注1) 知っていることを表す文章を読むこと(本書内の筆者の定義による)。

注2) 知らない事柄についての文章を読むこと(本書内の筆者の定義による)。

注3) 何度も繰り返して読むうちに、わからなかったことも自然にわかっていくこと。

問1. (①) (③) (④)の動詞をそれぞれ適当な形に変えなさい。

問2. [②] [⑤]に入れるのに適切なことばを、一つ選んで記号を書きなさい。

② a. とはいえ b. したがって c. さらに d. ところが

⑤ a. すなわち b. もっとも c. なぜなら d. それゆえ

問3. 下線部(1)「正解神話」とは、この文章においてどのようなものか説明しなさい。

問4. 下線部(2)「妥当な意味」に関して特徴を2つ挙げなさい。

問5. 下線部(3)「コンテキスト」とは、この文章においてどのようなものを指しているか。
本文のことばを使って書きなさい。

問6. この文章における筆者のコンテキストと読者のコンテキストとの関係について説明しなさい。

問7. 下線部(4)「ヘミングウェイ」のエピソードは、作家のコンテキストに関してどのようなことを述べようとしたものか。説明しなさい。

問8. 本文の内容に当てはまるものに○、当てはまらないものに×を書きなさい。

- a. 文章の意味はひとつだけであり、筆者の考えが優先される、というのは間違いだと多くの人が気付いている。
- b. T・S・エリオットは読者の解釈に批判的であり、晩年になって反論した。
- c. 推敲によって、筆者と読者とのコンテキストの差がもっともよく示される。
- d. 筆者が意図しなかった文章の意味を添削者が見つけることもある。
- e. 添削は、俳句や短歌ではよく行われるが、小説に関してはそうではない。

設問Ⅲ. 次の文の誤りと思う箇所に線を引き、例にならって書き直さない。

(例) 駅からタクシーに乗りて大学まで来ました。

→ 乗って

1. 友人はいつも、将来カナダに働きたいと言っています。
2. この喫茶店は静かので、落ち着いて仕事ができる。
3. 台風が近づいています。風が強いので窓を閉まってください。
4. わずか1か月の語学留学でしたが、充実な日々を過ごすことができました。
5. ずっと猛暑日が続いていましたが、昨日の夜はあまり暑くないでした。
6. コンサートの会場にはチケットを持っている人しか入れます。
7. テーブルの上においしいそうな料理がたくさん並んでいた。
8. 英語の成績が良かったので、奨学金がもらえることにしました。
9. 京都へ行けば、もみじの季節をおすすめします。
10. あ、そのマンガ、前から読みたかったんです。貸してもいいですか。

設問Ⅳ. 作文

最近の日本国内の出来事を取り上げ、あなたが考えたことを200字程度で書きなさい。

ダ・デアル体を用いること。